第III章

過去問の解答集

6 力のモーメント、角運動量、中心力

6.1

(1) 半径rの球の全質量 M_r は

$$M: M_r = R^3: r^3 \quad \Rightarrow \quad M_r = \frac{M}{R^3} r^3$$

となる. よって、働く力の大きさは次のように求まる.

$$|F| = \frac{GmM_r}{r^2} = \frac{Gm}{r^2} \frac{M}{R^3} r^3 = \frac{GmM}{R^3} r$$

(2) 力の x 成分は上の結果から次のようになる.

$$F_x = -|\boldsymbol{F}|\cos\theta = -\frac{GmM}{R^3}r\frac{x}{r} = -\frac{GmM}{R^3}x$$

(3) $m\ddot{x} = F_x$ より次式を得る.

$$m\ddot{x} = -\frac{GmM}{R^3}x$$

(4) 上の(3)の結果は、調和振動の方程式と同形であるから、その一般解は

$$x = A\cos(\omega t + \delta)$$

となる. ここで $\omega = \sqrt{GM/R^3}$ であり、A と δ は積分定数である. また周期は次のとおりである.

$$T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi \sqrt{\frac{R^3}{GM}}$$

6.2

(1) 保存力はポテンシャルの勾配で与えられるから、次のように求められる.

$$\begin{split} \boldsymbol{F}(\boldsymbol{r}) &= -\nabla U(\boldsymbol{r}) = -\left(\frac{\partial U}{\partial x}, \frac{\partial U}{\partial y}\right) = -\left(\frac{dU}{dr} \frac{\partial r}{\partial x}, \frac{dU}{dr} \frac{\partial r}{\partial y}\right) = -\frac{dU(r)}{dr} \left(\frac{x}{r}, \frac{y}{r}\right) = \frac{A}{r^2} \boldsymbol{e}_r \\ \text{ここで, } \boldsymbol{e}_r &= \boldsymbol{r}/r \text{ は } \boldsymbol{r} \text{ 方向の単位ベクトルであり, また次の関係が用いられている.} \end{split}$$

$$\frac{\partial r}{\partial x} = \frac{\partial \sqrt{x^2 + y^2}}{\partial x} = \frac{1}{2\sqrt{x^2 + y^2}} \frac{\partial (x^2 + y^2)}{\partial x} = \frac{2x}{2\sqrt{x^2 + y^2}} = \frac{x}{r}$$

(2) 角運動量は

$$L = r \times p = r \times m\dot{r}$$

120 第 III 章 過去問の解答集

と書けるので,これを時間で微分すれば

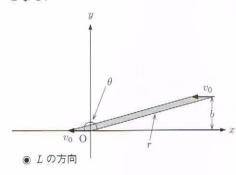
$$\dot{L} = \dot{r} \times m\dot{r} + r \times m\ddot{r} = 0 + r \times F = r \times F = r \times \frac{A}{r^2} \frac{r}{r} = 0$$

となる。この結果がゼロベクトルになるのは、2つの平行なベクトルの外積によるものである。

(3) $L=r \times m\dot{r}$ は時間によらないので、どこでも同じである。 $x=+\infty$ で計算すると、 $L=r \times mv_0$ であるから、その大きさは

$$|L| = |r| m v_0 \sin \theta$$

となる.



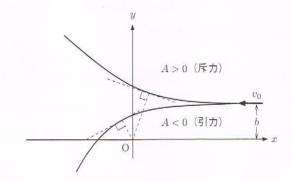
図のように v_0 を平行移動させて r の始点 にそろえれば、|L|/m は斜線の面積である。 $|r|\sin\theta = b$ であるから、

$$|\boldsymbol{L}| = mv_0b$$

となる。向きはrから θ だけ v_0 方向へ右ネジを回したときに、そのネジの進む向き、すなわち図の \odot 方向(+z方向)となる。

(4) 右図のとおり.

13

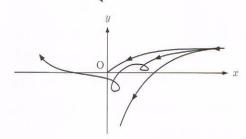


いま、Newton の第 2 法則を $m\frac{\Delta v}{\Delta t}=F$, $\therefore \Delta v=\frac{\Delta t}{m}F$ と書く.これは「v の変化分は F の方向を向いている」という定理を表している.また, $\Delta v=v(t+\Delta t)-v(t)$ であるから,この軌道において力は,次の図中の太い矢印の方向を向いている.

【注】軌道の形, 角運動量ベクトル Lの保存などから, 右図のような 現象は起こらないことに注意され

 Δv v(t) 移す

力は 🔪 の方向を向いている



(5) エネルギー保存則より、全てのrで

たい

$$E = \frac{1}{2}m\dot{r}^2 + \frac{A}{r} = \frac{1}{2}m{v_0}^2$$

である.ここで, $r\to +\infty$ において $U\to 0$ であることが用いられている.一方,角運動量保存則より,全ての r で

$$|\boldsymbol{L}| = |\boldsymbol{r} \times m\dot{\boldsymbol{r}}| = mv_0b$$

が成立する。粒子が最も原点に近づくとき、速度ベクトル \dot{r} は位置ベクトルrに垂直である。このことは以下のように証明される。 $r^2=r\cdot r$ をtで微分すれば、

$$2r\frac{dr}{dt} = 2\mathbf{r} \cdot \dot{\mathbf{r}}$$

となる. 原点に最も近づくときは,

$$\frac{dr}{dt} = 0 \quad \Rightarrow \mathbf{r} \cdot \dot{\mathbf{r}} = 0$$

すなわち、 $r \perp \dot{r}$ となる. したがって、最も近づいた時の距離を d として、角運動量の大きさは

$$|L| = |r \times m\dot{r}| = |r||m\dot{r}|\sin\theta = |r||m\dot{r}| = md|\dot{r}|$$

となる. これが mv_0b に等しいから、 $|\dot{r}|=bv_0/d$ を得る. これをエネルギーの式に代入すれば

$$\frac{1}{2}m\left(\frac{bv_0}{d}\right)^2 + \frac{A}{d} = \frac{1}{2}mv_0^2$$

となり,整理して次式を得る.

104

$$d^{2} - \frac{2A}{mv_{0}^{2}}d - b^{2} = 0 \quad \Rightarrow \quad \therefore d = \frac{A}{mv_{0}^{2}} + \sqrt{\left(\frac{A}{mv_{0}^{2}}\right)^{2} + b^{2}}$$

ここで根号の前の符号が正をとるのは、d>0 だからである.

(6) A=a>0 (斥力) と A=-a<0 (引力) のときの d の差は以下のようになる.

$$\begin{split} d(A=a) - d(A=-a) &= \frac{a}{mv_0^2} + \sqrt{\left(\frac{a}{mv_0^2}\right)^2 + b^2} - \left(\frac{-a}{mv_0^2} + \sqrt{\left(\frac{-a}{mv_0^2}\right)^2 + b^2}\right) \\ &= \frac{2a}{mv_0^2} > 0 \end{split}$$

よって、A < 0(引力)の方が原点に近づき、差は $2a/mv_0^2$ である.

6.3

- (1) $N = (2, -1, 1) \times (-2, 1, -2) = (1, 2, 0)$
- (2) $L/m = (1,1,1) \times (1,-1,-2) = (-1,3,-2)$. 平面の式 $L \cdot r = 0$ より -x+3y-2z = 0
- (3) ポテンシャルを $U(r_1, r_2) = \frac{K}{2}(r_1^2 + r_2^2) + \frac{A}{|r_1 r_2|}$ とおくと $m\ddot{r}_1 = -\nabla_1 U = -Kr_1 + A \frac{r_1 - r_2}{|r_1 - r_2|^3}, \ m\ddot{r}_2 = -\nabla_2 U = -Kr_2 - A \frac{r_1 - r_2}{|r_1 - r_2|^3}$

6.4

(1) $L = r \times m\dot{r}$. 運動方程式 $m\ddot{r} = F = f(r)e_r$ より, $\frac{dL}{dt} = \dot{r} \times m\dot{r} + r \times m\ddot{r} = 0 + r \times f(r)r/r = 0$, よってLは保存する.

 $L \cdot r = m(r \times \dot{r}) \cdot r = 0$, また L は定数ベクトル. $L \cdot r = 0$ は L に垂直で原点を通る 平面の方程式であるので、質点の運動はこの平面内に限られる.

(i) $L = (1, 1, -2) \times (1, 1, 1) = (3, -3, 0)$. (ii) $L \cdot r = 3(x - y) = 0$, $\sharp \circ \mathsf{T} x = y$. (2)

6.5

- (1) $\mathbf{r} = r\mathbf{e}_r \ \ \ \ \dot{\mathbf{r}} = \dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\mathbf{e}}_r = \dot{r}\mathbf{e}_r + r\dot{\mathbf{e}}_{\theta}, \ \ \ddot{r} = \ddot{r}\mathbf{e}_r + \dot{r}\dot{\mathbf{e}}_r + \frac{d}{dt}(r\dot{\theta})\mathbf{e}_{\theta} + r\dot{\theta}\dot{\mathbf{e}}_{\theta} = \mathbf{e}_r + r\dot{\theta}\mathbf{e}_{\theta}$ $(\ddot{r}-r\dot{\theta}^2)e_r+(2\dot{r}\dot{\theta}+r\ddot{\theta})e_{\theta}$. 運動方程式は $m[(\ddot{r}-r\dot{\theta}^2)e_r+(2\dot{r}\dot{\theta}+r\ddot{\theta})e_{\theta}]=-rac{k}{m^3}e_r$.
- (2) 設問 (1) より $2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta} = 0$. よって $\frac{dh}{dt} = \frac{d}{dt}(r^2\dot{\theta}) = 2r\dot{r}\dot{\theta} + r^2\ddot{\theta} = r(2\dot{r}\dot{\theta} + r\ddot{\theta}) = 0$.
- (3) 設問 (1) より $m(\ddot{r}-r\dot{\theta}^2)=-k/r^3$. h を用いて $\dot{\theta}$ を消去すると、 $m\ddot{r}=(mh^2-k)/r^3$. よって \ddot{r} <0の条件は mh^2-k <0.

二体問題と多体系 7

7.1

- (1) 天体 A, B の運動方程式はそれぞれ $m\ddot{r}_A=\frac{Gm^2}{2r^2}e_r, \ \frac{m}{2}\ddot{r}_B=-\frac{Gm^2}{2r^2}e_r.$ この 2 式よ り、重心の位置ベクトル $r_G=rac{mr_A+(m/2)r_B}{m+m/2}=rac{2r_A+r_B}{3}$ の満たす方程式 $\ddot{r}_G=0$, 相対座標ベクトルの満たす方程式 $\frac{m}{3}\ddot{r}=-\frac{Gm^2}{2r^2}e_r$ を得る. (2) r と r_G の表式を r_A , r_B について解くと, $r_A=r_G-r/3$, $r_B=r_G+2r/3$.
- (3) 全角運動量は $L=r_A \times m\dot{r}_A + r_B \times (m/2)\dot{r}_B = (3m/2)r_G \times \dot{r}_G + (m/3)r \times \dot{r}$. $\dot{r}_G=0$ で あるから $\mathbf{L} = (m/3)\mathbf{r} \times \dot{\mathbf{r}}$. よって $\dot{\mathbf{L}} = (m/3)(\dot{\mathbf{r}} \times \dot{\mathbf{r}} + \mathbf{r} \times \ddot{\mathbf{r}}) = 0 - \mathbf{r} \times (Gm^2/2r^2)e_r = 0$.

- (1) $m_1\ddot{x}_1 = -k(x_1 x_2 \ell), m_2\ddot{x}_2 = k(x_1 x_2 \ell).$
- (2) 設問 (1) の 2 式より $m_1\ddot{x}_1 + m_2\ddot{x}_2 = k(x_1 x_2 \ell)$. (2) 設問 (1) の 2 式より $m_1\ddot{x}_1 + m_2\ddot{x}_2 = 0$, $\ddot{x}_1 \ddot{x}_2 = -\left(\frac{1}{m_1} + \frac{1}{m_2}\right)k(x_1 x_2 \ell)$. 重 心座標は $x_G = (m_1x_1 + m_2x_2)/(m_1 + m_2)$ であるから $\ddot{x}_G = 0$. また $\mu \ddot{x} = -k(x \ell)$.
- (3) $y = x \ell$ とおくと $\ddot{y} = -(k/\mu)y$, この一般解は $y = A\cos\omega t + B\sin\omega t$ ($\omega = \sqrt{k/\mu}$). x の一般解は $x = A\cos\omega t + B\sin\omega t + \ell$.
- (4) 2 体系に撃力が加わった直後の重心の速度 $\dot{x}_G(0)$ は、 $(m_1 + m_2)\dot{x}_G(0) = \bar{F}$. 初 期位置は $x_{\mathrm{G}}(0)=\frac{m_1\ell}{m_1+m_2}$ より $x_{\mathrm{G}}(t)=\frac{\bar{F}}{m_1+m_2}t+\frac{m_1\ell}{m_1+m_2}$. 一方, $m_1\dot{x}_1(0)=0$, $m_2\dot{x}_2(0)=\bar{F}$ より $\dot{x}(0)=\dot{x}_1(0)-\dot{x}_2(0)=-\bar{F}/m_2$. 設問 (3) の一般解を考えると $\dot{x} = -A\omega\sin\omega t + B\omega\cos\omega t$. 初期条件から $x(0) = A + \ell = \ell$, $\dot{x}(0) = B\omega = -\bar{F}/m_2$. $\sharp \supset \mathcal{T} x(t) = -\frac{\bar{F}}{m_2 \omega} \sin \omega t + \ell.$

7.3

- (1) $m_1\ddot{x}_1 = -\frac{k}{(x_1 x_2)^3}, m_2\ddot{x}_2 = \frac{k}{(x_1 x_2)^3}.$
- (2) 設問 (1) の 2 式より, $\ddot{x} = \ddot{x}_1 \ddot{x}_2 = -\left(\frac{1}{m_1} + \frac{1}{m_1}\right) \frac{k}{(x_1 x_2)^3}$. 換算質量 $\mu =$ $m_1 m_2/(m_1 + m_2)$ を用いると $\mu \ddot{x} = -k/x^3$
- (3) 設問 (2) の解の両辺に \dot{x} をかけてtで積分すると (エネルギー積分), $\frac{1}{2}\mu\dot{x}^2=-\int \frac{k}{r^3}dx=$ $\frac{k}{2\sigma^2} + C$. 初期条件より $C = \frac{1}{2}\mu v_0^2 - \frac{k}{2\ell^2}$. よって $\dot{x}^2 = v_0^2 + \frac{k}{\mu} \left(\frac{1}{x^2} - \frac{1}{\ell^2} \right)$.
- (4) $\dot{x}^2 > 0$ が $x \to \infty$ でも成り立つことから $v_0^2 > k/(\mu \ell^2)$.

7.4

- $\begin{array}{ll} (1) & x_G = \frac{mx_1 + Mx_2}{m + M}. & (2) \; (m + M)\ddot{x}_G = 0. \\ (3) & \dot{x}_G = C \; \mbox{であるが, ヒントより} \; C = 0. & ゆえに \; x_G = C', \; \mbox{よって} \; mx_1^0 + Mx_2^0 = 0. \end{array}$ $mx_1' + Mx_2'$.
- (4) 設問 (3) の解に $x_1^0 = x_2^0 \ell/2$, $x_1' = x_2' + \ell/2$ を代入すると $x_2' x_2^0 = -\frac{m}{m+M}\ell$. よって $|x_2' - x_2^0| = \frac{m}{m + M} \ell$.

7.5

(1) 1 次元問題である。鉛直下方の速度を正にとる。 $\dot{P}=F$ (P は全運動量、F は外力の合力) を短い時間間隔 Δt で積分して得られる式 $\Delta P = F\Delta t$ を用いる. 図のように t と $t+\Delta t$ の間に、質量 M、速度 V の雨粒が、静止している質量 ΔM の水蒸気をくっつけて、質 量 $M + \Delta M$ 、速度 $V + \Delta V$ の雨粒となるものとする、これを全系として、その全運動 量の変化は ΔM , ΔV の 1 次までとって,

$$\Delta P = P(t + \Delta t) - P(t)$$

$$= (M + \Delta M)(V + \Delta V) - (M \cdot V + \Delta M \cdot 0)$$

$$\simeq M \cdot \Delta V + \Delta M \cdot V.$$

$$M, V$$

$$M + \Delta M, V$$

$$V + \Delta V$$

(2) 一方, $F\Delta t = Mg\Delta t$ でよく $((M + \Delta M)g\Delta t$ としても違いは $g\Delta M\Delta t$ であり, これは 2 次の微少量), 結局

$$M \cdot \Delta V + \Delta M \cdot V = Mg\Delta t \qquad \Rightarrow \qquad M\frac{\Delta V}{\Delta t} = Mg - \frac{\Delta M}{\Delta t}V.$$

(3) 両辺を M で割って変数分離し、積分する.

$$\begin{split} \dot{V} &= \frac{dV}{dt} = g - \frac{\dot{M}}{M}V = g - \alpha V \quad \Rightarrow \frac{dV}{g - \alpha V} = dt \quad \Rightarrow \quad \int \frac{dV}{g - \alpha V} = \int dt \\ &\Rightarrow \quad \int \frac{dV}{V - \frac{g}{\alpha}} = -\alpha \int dt \quad \Rightarrow \quad \log \left| V - \frac{g}{\alpha} \right| = -\alpha t + C, \end{split}$$

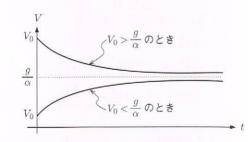
$$t=0$$
 で $V=V_0$ より $C=\log\left|V_0-\frac{g}{\alpha}\right|$. よって

$$\log \left| \frac{V - \frac{g}{\alpha}}{V_0 - \frac{g}{\alpha}} \right| = -\alpha t \quad \Rightarrow \quad \left| \frac{V - \frac{g}{\alpha}}{V_0 - \frac{g}{\alpha}} \right| = e^{-\alpha t} \quad \Rightarrow \quad \frac{V - \frac{g}{\alpha}}{V_0 - \frac{g}{\alpha}} = \pm e^{-\alpha t}$$

$$t=0$$
 で 左辺=+1, よって + をとる. 結局 $V=\left(V_0-\frac{g}{\alpha}\right)\mathrm{e}^{-\alpha t}+\frac{g}{\alpha}$

(4) 図を参照.

 V_0 が g/α より大きいか小さいかによって図のような振る舞いになる. いずれの場合も速度 V は $V_\infty=g/\alpha$ に近づく. この結果の物理的意味を,各自,考察しなさい.



7.6

134

鎖全体 (机から離れている部分と机の上に溜まっている部分の和) の全運動量の時間変化の式を用いる. 一つ一つの鎖がお互いに及ぼしあう力は内力なので、全運動量の式には入らない.

- (1) v = gt, $x = \frac{1}{2}gt^2$ から, t を消去して, $v^2 = 2gx$.
- (2) 机と離れている部分は速度 v で運動していて、机の上に溜まった部分は静止しているので、 $P = \rho(L-x)v + \rho x0 = \rho(L-x)v$.
- (3) 全運動量の時間変化率は、全外力に等しいと言う式を使う、全外力は鎖全体に働く重力と

机からの抗力である.

434

$$\frac{dP}{dt} = \rho Lg + F \tag{*}$$

(4) 前問の(3)と(2)と(1)から

$$F = \frac{dP}{dt} - \rho Lg = \frac{d\left(\rho(L-x)v\right)}{dt} - \rho Lg$$
$$= -\rho \dot{x}v + \rho(L-x)\dot{v} - \rho Lg$$
$$= -\rho v^2 - \rho xg = -3\rho xg$$

一方,全長xの鎖が静かに机の上に置いてあるときの抗力は $\rho g x$ であるから,それの 3倍の抗力が働いている。 $F=-\rho g x-2\rho g x$ と書けば, $-2\rho g x$ が上向きの抗力Nで(マイナスはNが上向きであることを意味する),この抗力が,机に衝突した鎖の部分の運動量を瞬時にゼロにしているのである.

(参考 1); 効力 N は次のように別の考えで求められる。鎖が長さ x だけ机の上に溜まっているとき,時間間隔 dt の間に机に衝突して速度を失う部分の速度は $v=\sqrt{2gx}$,質量は $dm=\rho dx$.よって $t\sim t+dt$ の間に失われる運動量は $dP=P(t+dt)-P(t)=0-(dm)v=0-(\rho dx)v=-\rho vdx$.これが力積 Ndt に等しいので, $Ndt=dP=-(\rho dx)v$.よって $N=-\rho(dx/dt)v=-\rho v^2$.この問題では $v^2=2gx$ であるから $N=-2\rho gx$.

(参考 2); エネルギーはどうなっているの?この問題を考えるために、(*) の両辺に $Pdt=\rho(L-x)vdt$ を掛けて、t=0 から t まで積分する。vdt=dx である。さらに、t=0 を手を離した時刻とすると、t=0 では t=00 であるから t=00 であるから t=00 であるから t=00 を t=00 であるから t=00

$$\begin{split} \frac{dP}{dt}Pdt &= (\rho Lg + F)\rho(L-x)vdt = (\rho Lg + F)\rho(L-x)dx, \\ \Rightarrow & PdP = (\rho Lg - 3\rho gx)\rho(L-x)dx, \\ \Rightarrow & \int_0^P PdP = \int_0^x dx (\rho Lg - 3\rho gx)\rho(L-x)dx, \\ \Rightarrow & \frac{1}{2}P^2 = \rho^2g\int_0^x dx \bigg(L-3x\bigg)\rho(L-x)dx = \rho^2gx(L-x)^2 \\ \Rightarrow & \frac{1}{2}\rho^2(L-x)^2v^2 = \rho^2gx(L-x)^2 \quad \Rightarrow \quad \frac{1}{2}\rho(L-x)v^2 = \rho gx(L-x) \end{split}$$

(この計算は (*) の両辺に vdt を掛けて積分する方が、仕事積分が現れるのでわかりやすいであろう) この最後の式の右辺を次のように変形する.

$$\begin{split} &\frac{1}{2}\rho(L-x)v^2 = \rho g\bigg(\frac{x-L}{2} + \frac{x+L}{2}\bigg)(L-x) \\ \Rightarrow &\frac{1}{2}\rho(L-x)v^2 + \rho g\frac{(L-x)^2}{2} = \rho g\frac{L^2}{2} - \rho g\frac{x^2}{2} \end{split}$$

126 第 III 章 過去問の解答集

左辺第1項は運動している鎖の部分の運動エネルギー,第2項は机から離れている鎖のポテンシャルエネルギー (その部分の重心が机から測って (L-x)/2 の高さの位置にあることに注意),右辺第1項が t=0 でのポテンシャルエネルギー (運動エネルギーはゼロ) なので,最後の右辺第2項がなければエネルギー保存則となっている.この余計な項 $-\rho g x^2/2$ は負で,机に衝突する鎖の輪が瞬時に止まるために失われる (熱などの形で別のエネルギー形態で存在するのではあるが) エネルギーである.

7.7

- (1) $\frac{d}{dt}(mv)=0$ (噴射された物質の運動量は 0 であるから,系の全運動量は mv)
- (2) $mv = m_0v_0$ (3) $m = m_0 \mu t$

$$(4) \quad v = \frac{m_0 v_0}{m} = \frac{m_0 v_0}{m_0 - \mu t} \ \text{を積分すると}, \quad x = 0 + \int_0^t \frac{m_0 v_0}{m_0 - \mu t'} dt' = \frac{m_0 v_0}{\mu} \log \frac{m_0}{m_0 - \mu t}$$

8 慣性モーメント

8.1

(1) 点 (x,y) の位置にある $dm = \sigma dx dy$ の微小質量を考える.

$$I^{(A)} = \int_{-a/2}^{a/2} \int_{-a/2}^{a/2} (x^2 + y^2) \sigma dx dy = 2a\sigma(x^3/3) \Big|_{-a/2}^{a/2} = a^4 \sigma/6 = M_A a^2/6$$
ここで、 $M_A = a^2 \sigma$ を用いた.

(2)

$$I^{(B)} = \sigma \int_0^{a/2} \int_0^{a/2} (x^2 + y^2) dx dy = 2(a/2) \sigma(x^3/3) \bigg|_0^{a/2} = \sigma a^4/24 = M_B a^2/6$$

ここで、 $M_B = \sigma a^2/4$ を用いた. (もちろん並行軸の定理などを駆使して求めてもよい.)

(3) $M_A = 4M/3$, $M_B = M/3$ であるから,

$$I = I^{(A)} - I^{(B)} = (M_A - M_B)a^2/6 = (4/3 - 1/3)Ma^2/6 = Ma^2/6.$$

8.2

(1)
$$I = \int_0^R \int_{-\alpha}^{\alpha} r^2 \sigma r dr d\theta = \sigma \int_0^R r^3 dr \int_{-\alpha}^{\alpha} d\theta = \sigma \frac{R^4}{4} \cdot 2\alpha = \sigma \alpha \frac{R^4}{2}.$$

(2) 板の全質量は
$$M = \int_0^R \int_{-\alpha}^{\alpha} \sigma r dr d\theta = \sigma \int_0^R r dr \int_{-\alpha}^{\alpha} d\theta = \sigma \alpha R^2$$
. $x = r \cos \theta$ より
$$x_G = \frac{1}{M} \int_0^R \int_{-\alpha}^{\alpha} x \sigma r dr d\theta = \frac{\sigma}{M} \int_0^R r^2 dr \int_{-\alpha}^{\alpha} \cos \theta d\theta = \frac{\sigma}{M} \frac{R^3}{3} \left[\sin \theta \right]_{-\alpha}^{\alpha} = \frac{2R \sin \alpha}{3\alpha}.$$
 対称性より $y_G = 0$ であるから $(x_G, y_G) = \left(\frac{2R \sin \alpha}{3\alpha}, 0 \right).$

(3) 平行軸の定理より,
$$I_G = I - Mx_G^2 = \sigma \alpha R^4 \left(\frac{1}{2} - \frac{4\sin^2 \alpha}{9\alpha^2} \right)$$
.

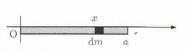
8.3

128

$$(1) \ I = \int dI, \quad dI = x^2 dm = x^2 \sigma dx, \quad (\sigma : 線密度)$$

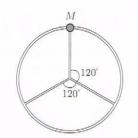
$$I = \int_0^a x^2 \sigma dx = \left. \sigma \frac{x^3}{3} \right|_0^a = \frac{\sigma a^3}{3} = \frac{\sigma a}{3} a^2 = \frac{m}{3} a^2$$

$$\sharp \, \text{tota}, I = I_G + m \left(\frac{a}{2}\right)^2 = \frac{1}{12} m a^2 + \frac{1}{4} m a^2 = \frac{1}{3} m a^2$$



(2) 3本の棒の慣性モーメント: $3 \times \frac{m}{3}a^2$ 円環の慣性モーメント: ma^2 (円環はすべての部分が 中心から等距離 a にある。)

Mの慣性モーメント: Ma^2 $I_1 = 3 \times \frac{m}{2}a^2 + ma^2 + Ma^2 = (2m + M)a^2$



(3) 中心力で M を移動させたので、全体の角運動量は保存する. はじめの角運動量 = $I_1\omega_1 = (2m+M)a^2\omega_1$ あとの角運動量 = $I_2\omega_2$

ここで、 $I_2 = 2ma^2$ である、(M は中心にあるので、 I_2 には効かない。) $I_1\omega_1 = I_2\omega_2 \ \ \ \ \ \ \ \omega_2 = \frac{I_1}{I_2}\omega_1 = \frac{(2m+M)a^2}{2ma^2}\omega_1 = (1+\frac{M}{2m})\omega_1$

8.4

(1) $I_z = \frac{2}{5}(Ma^2 + mb^2)$

(2) 球 2 に対して平行軸の定理を用いると $I_x = \frac{2}{5}(Ma^2 + mb^2) + m(a+b)^2$

(3)
$$z_G = \frac{M \cdot 0 + m(a+b)}{M+m} = \frac{m(a+b)}{M+m}$$

(4) 平行軸の定理より $I_x = I_G + (M+m)(0-z_G)^2$. よって $I_G = I_x - \frac{m^2}{M+m}(a+b)^2 =$ $\frac{2}{5}(Ma^2+mb^2)+\frac{Mm}{M+m}(a+b)^2$

8.5

(1) リング上の点は全て回転軸から同じ a の距離にあるから, $I=\int |{m r}_\perp|^2 dm=a^2\int dm=a^2$ Ma^2

(2) 面密度を σ とすると、 $M=4\pi a^2\sigma$. 図のリングの面積は $(2\pi a\sin\theta)ad\theta$ で、半径 は $a\sin\theta$ であるから、この部分の慣性モーメント dI は (1) の結果を用いて、dI= $\sigma(2\pi a\sin\theta)ad\theta(a\sin\theta)^2 = \sigma 2\pi a^4\sin^3\theta d\theta$. これを $0 \le \theta \le \pi$ の範囲で積分する. $\cos\theta = y$ とおけば $\sin\theta d\theta = -d(\cos\theta)$. こうして $I = \int dI = -\sigma 2\pi a^4 \int_1^{-1} (1-y^2) dy =$ $(8\sigma/3)\pi a^4 = 2Ma^2/3.$

8.6

 $(x_{\rm G},y_{\rm G})=(a,a)$. (2) $I_{\rm A}=m\cdot 0^2+m\cdot (4a)^2+2m\cdot (2a)^2=24ma^2$. (3) 平行軸の定理より $I_{\rm A}=I_{\rm G}+(m+m+2m)(a^2+a^2)$. これより $I_{\rm G}=16ma^2$.

- (1) まず $z \sim z + dz$ の薄い円板を考える、半径は $\sqrt{a^2 z^2}$, 面密度 $\sigma = \rho dz$, 慣性モーメント dI_z は $dI_z = \int_0^{\sqrt{a^2 z^2}} r^2 dm = (\rho dz) \int_0^{\sqrt{a^2 z^2}} r^2 2\pi r dr = \frac{\pi(\rho dz)}{2} (a^2 z^2)^2$. $I_z = \int_0^a dI_z = \frac{\pi \rho}{2} \int_0^a (a^2 z^2)^2 dz = \frac{4\pi \rho}{15} a^5 = \frac{2Ma^2}{5}.$ 途中 $\rho = \frac{M}{2\pi a^3/3}$ を使った.
- (2) $x \sim x + dx$ の薄い半円板の半径は $\sqrt{a^2 x^2}$, 慣性モーメント dI_x は $dI_x = \int_0^{\sqrt{a^2 x^2}} r^2 dm = (\rho dx) \int_0^{\sqrt{a^2 x^2}} r^2 \pi r dr = \frac{\pi (\rho dx)}{4} (a^2 z^2)^2. \ I_x = \int_{-a}^a dI_x = \frac{2Ma^2}{5}.$
- (*) 別解: 半球を 2 つ合わせた半径 a、質量 2M の球を考える。その慣性モーメントを求めると $I_z=I_x=\frac{4Ma^2}{5}$. 半球の慣性モーメントはその $\frac{1}{2}$. なお、半球は薄板ではないから「薄板の定理」を使って I_z から I_x を求めると不正解となるので注意。
- (3) $z \sim z + dz$ の円板の質量は $dm = \pi(\rho dz)(a^2 z^2)$. 重心の高さ h は $h = \frac{1}{M} \int_0^a z dm = \frac{\pi \rho}{M} \int_0^a z(a^2 z^2) dz = \frac{3}{8}a$. 平行軸の定理より $I_G = I_x Mh^2 = \frac{83}{320}Ma^2$.

9 剛体のつりあい、固定軸周りの回転

9.1

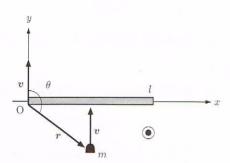
- (1) 水平方向: $T \sin \theta f = 0$. 鉛直方向: $T \cos \theta + S Mq = 0$.
- (2) $MgL\cos \pi/6 S2L\cos \pi/6 f2L\sin \pi/6 = 0$, $\supset \sharp b$ $\sqrt{3}(Mg 2S)/2 f = 0 \cdots (*)$
- (3) (1) から T を消去して、 $f\cos\pi/6 + (S-Mg)\sin\pi/6 = 0$. つまり $\sqrt{3}f + (S-Mg) = 0$. (2) から $S = Mg/2 f/\sqrt{3}$. これを第1式に代入して、 $\sqrt{3}f + (Mg/2 f/\sqrt{3} Mg) = 0$. こうして $f = (Mg/2)/(\sqrt{3} 1/\sqrt{3}) = (\sqrt{3}/4)Mg$.
- (4) θ は一般の角度とする。 (1) から T を消去して、 $f = \tan\theta(Mg S)$. この式と (2) の (*) から、 $\tan\theta/\sqrt{3} = \alpha$ と置いて、 $S = (1/2 \alpha)/(1 \alpha)Mg$ 、 $f = (\sqrt{3}/2)\alpha/(1 \alpha)Mg$. 滑らない条件は、 $f/S \le \mu_0$. よって μ_0 の下限は、 $(\sqrt{3}/2)\alpha/(1/2 \alpha)$. $\theta = \pi/6$ のときは $\alpha = 1/3$ なので、 $\mu_0 \ge \sqrt{3}$.
 - (注); 角度 θ の最大値は $\pi/3$. このとき糸が棒と一直線になる. よって $0 \le \theta \le \pi/3$ で考えると, $0 < \alpha < 1/\sqrt{3}$. この範囲では, f > 0, (もちろん S > 0.) θ をこの範囲に固定して μ_0 を減少させていくと, 上で得た下限で棒は滑り始める. 棒が接触している水平面上の点は右方向へ滑りだす. μ_0 を固定して θ を変えたとき (符号を含めて), どのようになるか考えてみると面白い.

158

(1)
$$I_0 = \int x^2 dM = \int x^2 \sigma dx = \frac{\ell^3}{3} \sigma = \frac{\ell \sigma}{3} \ell^2 = \frac{M}{3} \ell^2$$
 ただし、 σ は質量の線密度である.

(2)
$$I = I_0 + m \left(\frac{\ell}{2}\right)^2 = \left(\frac{M}{3} + \frac{m}{4}\right) \ell^2$$

- (3) $L_{\hat{m}} = r \times mv$; 方向は \odot の方向. $L_{\hat{m}}$ の 大きさは $L_{\parallel} = |\mathbf{r}| \cdot |m\mathbf{v}| \sin \theta = mv |\mathbf{r}| \sin \theta = mv \frac{\ell}{2}.$ これが衝突前の L_{ii} のz成分である.
- (4) $L_{\&}$ も \odot 方向を向いていて、その大きさは $I\omega$ である. よって $(L_{\mathcal{R}})_z = \left(\frac{M}{3} + \frac{m}{4}\right)\ell^2\omega$.



(5) 弾丸と棒の間の力は全系で考えると内力である. よって, $L_{\&}=L_{\pitchfork}$. したがって, $|oldsymbol{L}_{oldsymbol{lpha}}|=|oldsymbol{L}_{oldsymbol{\hat{n}}}|$ より

$$\left(\frac{M}{3} + \frac{m}{4}\right)\ell^2\omega = mv\frac{\ell}{2} \quad \Rightarrow \quad \omega = \frac{mv}{2\left(\frac{M}{3} + \frac{m}{4}\right)\ell}$$

9.3

おもり m_1 , m_2 と滑車の運動方程式は

$$m_1; \qquad m_1 \ddot{y} = m_1 g - T_1 \tag{A}$$

$$m_2; m_2 \ddot{y} = -m_2 g + T_2$$
 (B)

滑車;
$$I\ddot{\theta} = T_1 a - T_2 a$$
 (C)

$$y \ge \theta$$
 の関係; $y = a\theta + 定数$, これから $\ddot{y} = a\ddot{\theta}$ (D)

(A)(B)(D)を(C)に代入すると

$$I\frac{\ddot{y}}{a} = (-m_1\ddot{y} + m_1g)a - (m_2\ddot{y} + m_2g)a$$

$$\Rightarrow \left(m_1 + m_2 + \frac{I}{a^2}\right)\ddot{y} = (m_1 - m_2)g,$$

$$\Rightarrow \ddot{y} = \frac{m_1 - m_2}{m_1 + m_2 + \frac{I}{a^2}}g = \frac{(m_1 - m_2)a^2}{(m_1 + m_2)a^2 + I}g$$

(参考); (C) から

$$T_1 - T_2 = I \frac{\ddot{\theta}}{a} = I \frac{\ddot{y}}{a^2} = \frac{(m_1 - m_2)I}{(m_1 + m_2)a^2 + I}g$$

 $T_1-T_2=I\frac{\ddot{\theta}}{a}=I\frac{\ddot{y}}{a^2}=\frac{(m_1-m_2)I}{(m_1+m_2)a^2+I}g$ この T_1 と T_2 の違いで滑車を回転させているのである。糸の張力は滑車に巻きついた部分で 連続的に変化している(不連続であるとそこで糸が切れる!).

9.4

(1)
$$I_G = 2 \int_0^\ell x^2 \rho dx = \frac{2}{3} \rho \ell^3 = \frac{M}{3} \ell^2 \quad (\exists \exists \ \mathcal{C} \ M = 2\rho \ell).$$

(2) 平行軸の定理より
$$I = M(a^2 - \ell^2) + I_G = M(a^2 - 2\ell^2/3)$$
.

- (3) $I\ddot{\theta} = -Mg\sqrt{a^2 \ell^2}\sin\theta$. [注: 円周から棒にはたらく垂直抗力は O の周りの力のモーメントがゼロであることに注意.] 設問 (2) で求めた I を代入すると $\left(a^2 2\ell^2/3\right)\ddot{\theta} = -g\sqrt{a^2 \ell^2}\sin\theta$.
- (4) $\sin \theta \approx \theta$ を用いると $\ddot{\theta} = -\omega^2 \theta$, $\omega^2 = \frac{g\sqrt{a^2 \ell^2}}{a^2 2\ell^2/3}$. 周期は $T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi \sqrt{\frac{a^2 2\ell^2/3}{g\sqrt{a^2 \ell^2}}}$.

- (1) 棒の質量は $M=\sigma\ell$ であるから $I\ddot{\theta}=N=rac{\ell}{2}Mg\cos\theta=rac{1}{2}\sigma\ell^2g\cos\theta.$
- (2) (1) の方程式の両辺に $\dot{\theta}$ をかけると $\frac{1}{2}I\frac{d}{dt}(\dot{\theta}^2) = \frac{1}{2}\sigma\ell^2g\cos\theta\dot{\theta}$. 時間 t で積分すると $\frac{1}{2}I\dot{\theta}^2 = \frac{1}{2}\sigma\ell^2g\int\cos\theta d\theta = \frac{1}{2}\sigma\ell^2g\sin\theta + C. \ \theta = 0 \ \sigma \ \xi \ \dot{\theta} = 0 \ \xi \ \theta = 0 \ \xi$
- (3) 点 A 周りの角運動量の保存則から $I\omega + 0 = I\omega' + \ell mv$, よって $\omega' = \omega \ell mv/I$.

9.6

- (1) $I = ma^2$ (2) $|dF| = \mu' g dm$
- (3) $N = \int adF = -\mu'ga \int dm = -\mu'mga$. Lot $I\dot{\omega} = -\mu'mga \ (\Phi \grave{\lambda} \ \dot{\omega} = -\mu'g/a)$
- (4) 設問 (3) の式より $\omega = \omega_0 \frac{\mu' m g a}{I} t$. 静止までの時間は $t = \frac{I}{\mu' m g a} \omega_0$ (ゆえに $\frac{\omega_0 a}{\mu' g}$)

9.7

- (1) 棒が円筒から受ける抗力の水平成分を R_x , 鉛直成分を R_y とすると、力の合力のつり あいより $R_x=0$, $R_y=Mg+mg$. 抗力の大きさを R とすると $R_y=R$ であるから, R=(M+m)g.
- (2) 棒の中心を C' とすると、題意より C'D= $a\alpha$ 、DB= $\ell-a\alpha$. 点 D のまわりの力のモーメントは $Mga\alpha\cos\alpha-mg(\ell-a\alpha)\cos\alpha=[Ma\alpha-m(\ell-a\alpha)]g\cos\alpha=0$.
- (3) 設問 (2) より $m=\frac{Ma\alpha}{\ell-a\alpha}$. 設問 (1) の結果に代入すると $R=\left(1+\frac{a\alpha}{\ell-a\alpha}\right)Mg=\frac{\ell}{\ell-a\alpha}Mg$.

10 剛体の平面運動

10.1

- (2) $L_G = -($ 垂線の長さ $h) \times mv_G$. $h = \min(x^2 + y^2) = \min[x^2 + (ax + b)^2]$. $f(x) = x^2 + (ax + b)^2 = (a^2 + 1)x^2 + 2abx + b^2$ とおくと $f' = 2(a^2 + 1)x + 2ab = 0$ のとき $x = -\frac{ab}{a^2 + 1}$. よって $\min f(x) = f(-\frac{ab}{a^2 + 1}) = \frac{b^2}{a^2 + 1}$ より $h = \frac{b}{\sqrt{a^2 + 1}}$. $L_G = -\frac{mbv_G}{\sqrt{a^2 + 1}}$.
- (3) $L_z = L_G + L'_z = \frac{1}{12}ml^2\omega \frac{mbv_G}{\sqrt{a^2+1}}$

10.2

 $(1) (ma^2/2)\ddot{\phi} = Fa$

- (2) ヒントの r を原点 O から G にひいたベクトル \overrightarrow{OG} と見なせばよい. $r = |\overrightarrow{OG}|$ であるから、r は時間によらないのでその時間微分はゼロ、よって $\ddot{r} = -r\dot{\theta}^2 e_r + r\ddot{\theta} e_\theta$ となる、こうして、重心 G の e_θ 方向の運動方程式は、 $m\ddot{r}=$ 外力 の両辺の θ 方向の成分を取って、 $m(R-a)\ddot{\theta}=F-mg\sin\theta$.
- (3) $(R-a)\dot{\theta}$.
- $(4) a\dot{\phi}$
- $(5) (R-a)\dot{\theta} + a\dot{\phi} = 0$
- (6) (5) から、 $a\ddot{\phi} = -(R-a)\ddot{\theta}$. (1) から $F = (ma/2)(ma/2)\ddot{\phi} = -(m/2)(R-a)\ddot{\theta}$. これを (3) の結果に代入して、 $m(R-a)\ddot{\theta} = -(m/2)(R-a)\ddot{\theta} mg\sin\theta$. こうして、 $(3m/2)(R-a)\ddot{\theta} = -mg\sin\theta$.
- (7) $(3m/2)(R-a)\ddot{\theta}=-mg\theta$. よって $\ddot{\theta}=-(2g/3(R-a))\theta$, 周期は $2\pi/\omega=2\pi\sqrt{3(R-a)/2g}$.

- (1) 円板の重心は、接触点に垂直な方向に運動しない。向心力は $-M(\ell+a)\dot{\theta}^2$ で与えられるから、つりあいの式は $-M(\ell+a)\dot{\theta}^2=-Mg\cos\theta+N$.
- (2) 円板の重心のテーブルに沿った速度は $(\ell+a)\dot{\theta}$ であるから,運動エネルギーは $K=\frac{1}{2}M(\ell+a)^2\dot{\theta}^2$. エネルギー保存則 $E=K+Mg(\ell+a)\cos\theta=Mg(\ell+a)$ から $\dot{\theta}=\sqrt{\frac{2g(1-\cos\theta)}{\ell+a}}$.
- (3) 設問 (1), (2) より $N = Mg\cos\theta M(\ell+a)\dot{\theta}^2 = 3Mg\cos\theta 2Mg \ge 0$. テーブルから離れるとき N = 0 であるから $\cos\theta_0 = 2/3$.
- (4) 初期位置からの接触点の移動距離は、テーブル上を $\ell\theta$ 、円板上を $a(\phi-\theta)$ である $(\phi=\theta)$ のとき、接触点は円板上を移動しないことに注意)。 両者が等しいことから $\dot{\phi}=\frac{\ell+a}{a}\dot{\theta}$. 別解: テーブルに沿った円板の重心の速度は $(\ell+a)\dot{\theta}$ 、重心から見た円板表面の速度は $a\dot{\phi}$. 接触点が滑る速度 $(\ell+a)\dot{\theta}-a\dot{\phi}=0$ (過去問 10.2 を参照).
- (5) 円板の重心まわりの慣性モーメントは $I=\int_0^a r^2 2\pi r \sigma dr=2\pi \sigma \frac{a^4}{4}=\frac{1}{2}Ma^2$. エネルギー保存則 $E=\frac{1}{2}M(\ell+a)^2\dot{\theta}^2+\frac{1}{2}I\dot{\phi}^2+Mg(\ell+a)\cos\theta=Mg(\ell+a)$ に設問 (4) の結果を代入すると $\dot{\theta}^2=\frac{4g(1-\cos\theta)}{3(\ell+a)}$. よって垂直抗力は $N=Mg\cos\theta-M(\ell+a)\dot{\theta}^2=(7/3)Mg\cos\theta-(4/3)Mg\geq 0$. 円板が離れる角度で N=0 であるから $\cos\theta_r=4/7$.

10.4

- (1) $\bar{F} = \Delta P = MV$
- (2) $L' 0 = (h a)\bar{F} = (h a)MV$
- (3) 球の角速度を ω とすると $L'=I_G\omega$. 滑らないことから $\omega=V/a$ であるから,設問 (2) の解より $h=a+\frac{I_G}{Ma}$.
- (4) 球の回転の軸方向に z 軸を取る. z と z+dz の間の円板 (半径 $\sqrt{a^2-z^2}$) の慣性モーメ

ントを dI, とすると

$$dI_z = \int (x^2 + y^2) dm = \int_0^{\sqrt{a^2 - z^2}} r^2 (\rho dz) 2\pi r dr = \frac{\pi}{2} \rho (a^2 - z^2)^2 dz,$$

$$I_G = \int_{-a}^a dI_z = \int_0^a \pi \rho (a^2 - z^2)^2 dz = \frac{8}{15} \pi \rho a^5 = \frac{2}{5} M a^2.$$

途中 $M = 4\pi \rho a^3/3$ を用いた.

別解として、3次元極座標を用いると

$$I_G = \int (x^2 + y^2) dm = \int_0^a \int_0^{\pi} \int_0^{2\pi} (r \sin \theta)^2 \rho r^2 \sin \theta dr d\theta d\phi,$$

または、対称性から

$$I_G = \int (x^2 + y^2)dm = \frac{2}{3} \int (x^2 + y^2 + z^2)dm = \frac{2}{3} \int_0^a r^2 \rho 4\pi r^2 dr,$$

等からも計算できる. 求めた I_G を設問 (3) の解に代入すると $h = \frac{1}{5}a$.

(*) 撃力を加えた前後の運動を考えるとき、球と水平面間の摩擦力は無視できることに注意 されたい、摩擦力は有限の大きさのため、微小時間の力積には寄与しない、

10.5

(1)
$$L'_{A} = I_{G} \frac{v}{a} k$$
.

(2) 円板の角速度ベクトルは
$$\omega = \frac{v'}{a} \mathbf{k}$$
. $L'_{\mathrm{B}} = I_{\mathrm{G}} \omega = I_{\mathrm{G}} \frac{v'}{a} \mathbf{k}$.

(3)
$$L_G^{(A)} = M(a-h)\mathbf{j} \times (-v\mathbf{i}) = M(a-h)v\mathbf{k}$$
. $L_G^{(B)} = Mav'\mathbf{k}$.

(4)
$$\Delta L = L'_{B} + L_{G}^{(B)} - (L'_{A} + L_{G}^{(A)}) = \left[I_{G} \frac{v' - v}{a} + M\{av' - (a - h)v\}\right] \mathbf{k}.$$
(5) O に関する力のモーメントは $\mathbf{N} = 0$, したがって $\Delta L = 0$.
(6) $v' = \frac{I_{G} + M(a - h)a}{I_{G} + Ma^{2}}v.$

(5)
$$O$$
 に関する力のモーメントは $N=0$, したがって $\Delta L=0$

(6)
$$v' = \frac{I_G + M(a-h)a}{I_C + Ma^2}v$$

(1) $x = a\theta + \text{const}$

(2)
$$M\ddot{x} = T - F$$
, (*) $m\ddot{x} = mg - T$ (**)

(3)
$$I\ddot{\theta} = Ta + Fa$$

(4) (1)
$$\hbar \dot{b} \ddot{x} = a\ddot{\theta}$$
 (2) $\mathcal{O}(*) \times a + (3) \ \dot{c}(**) \ \dot{h} \dot{b}$

$$2Ta = aM\ddot{x} + I\ddot{\theta} = \left(aM + \frac{I}{a}\right)\ddot{x} = 2a(mg - m\ddot{x}),$$

$$\ddot{x} = \frac{2amg}{Ma + \frac{I}{a} + 2am} = \frac{2amg}{\frac{3Ma}{2} + 2am} = \frac{g}{1 + \frac{3M}{4m}}.$$

10.7

1

「全系の重心は部分系の重心の重心」という定理を用いる。棒のみの重心は原点で、そ (1)こに棒の質量 M を集中させる. 弾丸の位置は x=L でそこに質量 M がある. この仮 想的な系の重心を求めればよい、X = (0M + LM)/(M + M) = L/2.

- I_1 は平行軸の定理から求める、 $I_1=ML^2/3+M(L/2)^2=(7/12)ML^2$ 、 $I_2=M(L/2)^2$ 、こうして $I=I_1+I_2=(7/12+1/4)Ml^2=(5/6)ML^2$ 、 (別解); (棒+弾丸) の全系に対して並行軸の定理を用いてもよい、O を通り棒に垂直な軸の周りの全系の慣性モーメントを \tilde{I} とすると、並行軸の定理から、 $\tilde{I}=I+2M(L/2)^2$ 、ところが、 $\tilde{I}=ML^2/3+LM^2=4ML^2/3$ であるから、 $I=\tilde{I}-2M(L/2)^2=4ML^2/3-2M(L/2)^2=(4/3-1/2)ML^2=(5/6)ML^2$.
- (3) 衝突の際の力は内力なので、衝突前後の全運動量が保存する. $2M\dot{X}=0,\ 2M\dot{Y}=MV_0.$ これから、 $(\dot{X},\dot{Y})=(0,V_0/2).$
- (4) 重心 G に関して弾丸が衝突前に持っていた角運動量は、 $MV_0L/2$. 棒は静止していたので角運動量ゼロ. 力は内力なので重心のまわりの角運動量は保存する. よって、 $I\dot{\theta}=0+MV_0L/2$. これから、 $\dot{\theta}=MLV_0/(2I)=(3/5)(V_0/L)$.
- (5) 座標が ((L/2) + a, 0) である点の衝突直後の速度の y 成分は、 $\dot{Y} + a\dot{\theta} = (1/2)V_0 + (3/5)(aV_0/L)$. これがゼロとなるのが静止条件. この条件を満たすためには、a = -(5/6)L. x 座標は、x = (L/2) + a = (L/2) (5L/6) = -L/3.

- (1) $M\ddot{X} = F_x + Mg$, $M\ddot{Y} = F_y$.
- (2) $I\ddot{\theta} = F_x h \sin \theta F_y h \cos \theta$. $\sharp \not \subset l \not = F_x (Y y_0) F_x X \not \subset l \not = V$.
- (3) $X = h\cos\theta$, $Y = y_0 + h\sin\theta$.
- (4) $X \simeq h$, $Y \simeq y_0 + h\theta$. 運動方程式は $0 = F_x + Mg$, $M(\ddot{y}_0 + h\ddot{\theta}) = F_y$.
- (5) $I\ddot{\theta} = F_x h\theta F_y h = -Mgh\theta Mh(\ddot{y}_0 + h\ddot{\theta})$. 整理して、 $(I+Mh^2)\ddot{\theta} = -Mgh\theta Mh\ddot{y}_0$.
- (6) $\ddot{y}_0 = 0$ のとき、 $\ddot{\theta} = -\frac{Mgh}{I + Mh^2}\theta$. これから $\omega_0 = \sqrt{\frac{Mgh}{I + Mh^2}}$.
- (7) $\ddot{y}_0 = -a\omega^2\cos\omega t$ を (5) の式に代入、 $(I+Mh^2)\ddot{\theta} = -Mgh\theta + Mha\omega^2\cos\omega t$ 、特殊解 を $\theta = C\cos\omega t$ と仮定して求める、代入して、 $[-(I+Mh^2)\omega^2 + Mgh]C = Mha\omega^2$ 、これから、 $C = \frac{Mha\omega^2}{(I+Mh^2)(\omega_0^2-\omega^2)}$ 、C は $\omega = \omega_0$ のとき最大、この現象は「共鳴」と呼ばれる。

10.9

454

- (1) $ML_G = \int_0^\ell x 2\sqrt{\ell^2 x^2} \sigma dx = \frac{2\sigma}{3} \ell^3$. $M = \sigma \frac{\pi \ell^2}{2} \ \ \ \ \ \ \ \ L_G = \frac{4}{3\pi} \ell$.
- (2) 重心 G の A に対する高さ $y_G = -L_G \cos \theta$ を用いると $U(\theta) = Mgy_G + C$. U(0) = 0 になるようにポテンシャルの原点を選ぶと $U(\theta) = MgL_G(1-\cos \theta)$.
- (3) 角度 θ 傾いたときの A' の座標は $(\ell\theta,0)$ である (円周の長さ $\ell\theta$ だけ右に移動する). 重 心 G の位置は $r_G=(\ell\theta-L_G\sin\theta,-L_G\cos\theta)$.
- (4) $\dot{r}_G = \dot{\theta}(\ell L_G \cos \theta, L_G \sin \theta)$ より、運動エネルギーは $K = \frac{1}{2}M\dot{r}_G^2 + \frac{1}{2}I_G\dot{\theta}^2 = \frac{1}{2}M\dot{\theta}^2(\ell^2 2\ell L_G \cos \theta + L_G^2) + \frac{1}{2}I_G\dot{\theta}^2$. 全エネルギーは $E = K + U = \frac{1}{2}M\dot{\theta}^2(\ell^2 2\ell L_G \cos \theta + L_G^2) + \frac{1}{2}I_G\dot{\theta}^2 + MgL_G(1 \cos \theta)$.